

18 父は、武者絵ばかりかいていたものだから、女の子向きの絵を知りません。19 考えに考えた末にかいたのが、この巴御前です。

20 巴御前は、女ながらもよろいかぶりに身を固め、なきなだふるって、寄せくる敵を、ばったばったとなぎたおしたという、勇ましく入ります。

21 父ったら、まねて、その風の絵に合わせるみたらしい、わたしに友江の名前を付けたんです。

● 書かれているなかみ（映像・感情・説明）

武者絵しかかいたことのなかった父だが、我が子のために、考えて考えて、巴御前の絵をかいた。男の子でなくて、がっかりした父だが、我が子に対する愛情は深い。

わたしの名前の由来からも、父の我が子に対する思いや願いがうかがえる。これは、現代でも同じ事。あらためて、自分（子どもたち）の名前の由来を聞かす活動をとりいれてもいいかもしれない。

T だが どうだった？

C 父は、知りません。

C 父は、女の子向きの絵を知りません。

T 女の子向きの絵って、どんな絵なんだろう。

C 女の子が好きそうなお絵

C かわいい絵

T じゃあ、この物語の時代では、どんな絵だと思っ？

C お嬢様？

C おじょうさまみたいな

C きれいな着物を着ているかわいい女のこの絵

* 羽子板などにありそうなので、写真や実物を見せられると
いっ

T そうだね。女の子向きの絵って、女の子らしい絵という感じだね。今でも、みんなそうなのかな？

* 簡単なフリートーク。深入りしない。

T 昔の日本ではね、男は男らしく、女は女らしくいう感じが、強くてわかれてきたんだ。「ひつひ」というのがわかるけど、くさくさした感じがね。おじいさん、おばあさんがいる家では、聞くといいね。

T えて、お父さんは、女の子向きの絵を知らなかったんだ。理由が、ちゃんと書いてあるね。

C 武者絵ばかり書いていたものだから

T そうだね。お父さんが得意なのは、

C よろいかぶりの武者絵

T そうだった。

ちゅっ、この書き方からわかることを考えてもらおう。

(27)

A、武者絵ばかりかいていたものだから

イ、武者絵をかいていたから

C 武者絵ばかりっていうんだから、武者絵しかかいたことがない。

C 武者絵だけをかいていた。

18 武者絵ばかり



ばかり（副助）

(1) 物事を限定する意を表す。活用語に付く場合、古くは連体形に接続することが多い。

A、そのもの一しに限定する。だけ。のみ。

「いつも怒ってーいる」「これーでなく、ほかのもあげないと、あの人は満足しないでしょう」

イ、程度がそれ以上に出ないの意を表す。…にすぎない。

「今はただ故人の冥福を祈るーであります」

ウ、ただそれだけで、他にないもありえないの意を表す。

「毎日、雨ー降ってる」

「E、（おからの）」の形で「ただそれだけの原因で、事態が悪化するの意を表す。」

後略

「忠告をくだーに、かえって頼まれてしまった」

もの（既出） 文4

③ 《ーだ》の形で《・当然または普通なことになるという意を表す。時評がとびついたらーだから運刻した》世の中はそういうーだ」

・ 感動や強調の気持を表す。「見事としてのけたーだ」「そうしたーである」「人は自分の義務を念る理由に事欠くーではな

くだから

次に書いてあることと理由をあらわします。

「から」は、「わたし」の考えの理由。

* 「〜するものだから」「〜するもの」の形で、理由をあらわします。

「日本語の文法」p231

〜GR

次に書いてあることと理由をあらわします。

「の」「は」「わたし」の考えとは関係ない原因。

おれ 【おれ】

- (1) 向くこと。また、向いている方向。
- 「南一の家」「座席の―を変えぬ」
- (2) ある意志や考えをもっている人。また、その意志や考えの内容。
- 「御用の―は受付まで」「反対の―もめるが」
- (3) 行為・行動などの傾向。
- 「理想主義に走る―がある」
- (4) その方面に適していること。また、適している方面。
- 「初心者―の辞書」
- (5) ちよっとしたこと本気になること。ささいなことにも本気で腹を立てること。
- 「むづ―に人に反対する事が、虞美人草（漱石）――になる」
- 「ちよっとしたこと」に（本気で腹を立てる）。
- * 本文の場合は、(4)。現代なら、「シエンダーフリー」の立場から、バスシンプを浴びるかもしれない。時代性をちゃんとおさえておきたい。

19 考えに考えた末に 風の かいだのが ―― 巴御前です。

すえ【末】

- (1) 物のほし。先端。⇨本もたれ「竹やおの―」
 - (2) ぎょうだいのうち、一番下の子。「―の子」
 - (3) 子孫。後裔「じっさい」。「藤原氏の―」
 - (4) 時間の最後。「年の―」「月―」
 - (5) 未来。将来。ゆめくすえ。「―が案じられる」「―の約束をしたからついで、果して其通りに遂げられるか当世書生気質（道徳）」「―の問題」
 - (6) 道徳観念のすたれた時代。「世も―だ」
 - (7) 主要でないこと。大した問題ではないこと。「―の問題」
 - (8) 短歌の下の句。
- * 本文では、(4)。かなり長い間考えたことがわかる。

くすの(が) 動名詞(既出)

T そうだね。お父さんは、武者絵をかくのが得意で、お母はんも気持ちがよくなるくらいだったんだ。

C 「ものだ」というのは、最初の方までできたよ。

C ぶつ、そうだったということ

C お父さんにとっては、武者絵をかくのが普通だった。

C 絵といえば、武者絵だったんです。

T そうだね。お父さんは、武者絵しかかかなかった。それがあたりまえだったんだね。(*もしかししたら、「ものだ」は強調をあらわすのかもしれない) だって、わたしの田舎ではぶつだったかどうかって。

C 男の子が生まれると、風をあげた。

C 男の用の風ばかりかいていた

T 女の子が生まれても、

C 風はあげなかった。

C つまり、お父さんは、女の子のための風は作ったことがない。

C だから、知らないんだ。

T そういうことだね。じっさいが、今のお父さんはぶつだじっさい。自分の初めての子が女の子だった

T 普通なら、

C 風をあげない

T でも？

C 自分の子はかわいいから、風をあげてやりたかったと思ってる。

C 生まれてくるまで、そんなことばかり考えていたんだから、たごあげをあきらめきれない。

T そうだね。そういう気持ちのお父さんだ。

C そうで、次の文。

C 考えに考えた末にかいのが、この巴御前です。

T お父さんは、かいたんだ。普通は、女の子にはかかないけど、

C 自分の子のためにかいた。

T 考えに考えた末にっていうのは、ぶつじっさいだじっさい。ものすじっさいじっさいけんめいかいた。

T 時間は？

C 長い間考えたと思う。

T そうなんだ。考えて考えて、すじっさい考えて、もしかししたら、何日も考えて、何をかくか決めただよ。それが

C この巴御前。

T またまた、「この」がでました。

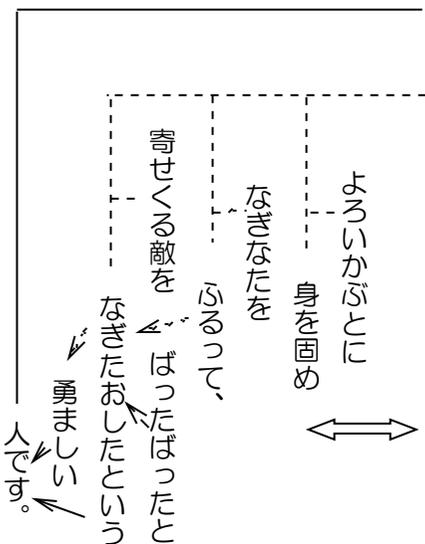
C 今、目の前にある風のじっさい。

T そう、風を目の前にして、もしかししたら、風を持って思い出話してただんだよね。

C 巴御前ってわかる？

C 知らない。

T それが、次に書いてあるね。



ながら【▼乍ら】

(接助)

(1) 動詞および動詞型活用 of 助動詞の連用形に付いて、その動作・作用と下にくる語の動作・作用とが並行して行われることを表す。
 「楽しく語り合い、並木道を歩いて行った」「ラジオを聞き、仕事をやる」

(2) 体言・動詞、および動詞型活用 of 助動詞の連用形、形容詞の連体形 (古くは形容詞語幹) などにつけて、上の事柄と下の事柄とが矛盾する関係にある意を表す。…(こも)かわらぬ。…ではあるが。…つるぬい。
 「悪口を言われ、少しも怒らぬ」「若く一気がきくつるぬい」

(3) 体言・副詞、動詞の連用形などにつけて、ある状態のままである意を表す。…のまま。…のとおろ。
 「立ち一握り飯をほおぼる」「つしもの事だ」

(4) 体言・副詞などにつけて、「全部」「ちっかす」「そむいん」などの意を表す。
 「こん口を反一かごつて食へぬ」

* 「よろいながら」は、一般的には、(3)の用法で、品詞としては、副動詞、文の部分としては、修飾語、意味的には同時形とされる。が、ここでは、逆説的な意味としての(2)にあたる。
 「日本語の文法 p134」

身を固める
 (1) 結婚して家庭をもつ。また、定職につく。
 (2) なぎなたの身丈度をたぬ。
 「鎧兜よろいかぶと一・ぬい」

なぎなた 【<長刀>/>薙刀</>肩</>突▽刀】

(1) 幅広く反りの強い刀身に、長い柄をつけた武器。平安時代から主に歩卒や僧兵が用い、南北朝時代以後は上級武士も使用したが、槍の発達で戦国時代以後は戦いの主要武器ではなくなった。江戸時代には婦人も用いた。

(2) 「薙刀草履よろい」の略。
 *写真等で示すのが正しい。

よせ・くる【寄せ来る】

T この文は、だれのこじ?

C 巴御前。

T 巴御前の説明だ。文の最後に書いてあるのは?

C 人です。

T 巴御前は、人です、という文だ。これじゃ、わからないね。

C そこで、どんな人か、説明が書いてある。

T まず、人をくわしくしているのは?

C 勇ましい人

C 女。

C ばったばったとなぎたおしたという人

T ちょっと、そこまでしておこう。まずは、そういう人なんだ。女の人なんだね。お父さんが今までかいてきたのは?

C 男

T 武者絵といえば、男だ。でも、生まれたのが女の子だから、

C 女の人をかいたんだ。けど、・・・?

T 巴御前が、どんな人だったか、くわしく見てみよう。

C 「なぎたおした」というのは、だれを?

C よせくる敵

T 敵だ。つまり、巴御前は何をしているの?

C 戦争。

C つくれ

T そうなんだね。これは、戦争をやっているんだ。巴御前と

C いうのは、戦争でたかかった人だったみたいだね。

C じゃって、あたりのまえのことなのかな?

C 女は、つくれはつかない。

T 時代劇なんかを見ていると、女の人がいくさをしたりは

C てないよね。

C でも、「あまみ」は女だよ。

C 水戸黄門にも出ている。

T まあ、物語の中ではね。でも、それでも、女の方は、忍者

C とかでしょ。巴御前は、本当にいた人だ。そのいくさの仕方

C も、ファミマのとは、ちがうよ。じつちがうかとつうじ、

T 巴御前の格好が書いてあるでしょ。

C よろいかぶとに身を固め、

T よろいかぶとをつけているんだ。身を固めるというのは、

C ちゃんとした格好をするということ。何のための格好かとい

C う?

C いくわのため。

T 普通、よろいかぶとをつけるのは?

C 男だった。

T 書いてあったね。鎧兜の武者絵になっている人。

C 源義経、八幡太郎義家、武田信玄

T みんな、男だ。侍の時代だからね。いくさをするのは、男

C だった。これも、男らしさかな。

T ところが、巴御前は、「女ながらも」って、書いてあるよ。

C 「ながらも」って、わかる?

T 子どもながらも、なかなかしっかりしている。

C などと使われる。

(動カ変)「文カ変よせ・く

(1)押し寄せて来る。攻め寄せて来る。

「一・くる波」「一・くる敵をものこませず」

なぎたお・す ーたふす【▼薙ぎ倒す】

(動サ五「四」)

(1)横にはらって倒す。「草を鎌でー・す」

(2)勢いよく次々に倒す。「並みいる強豪をー・す」

いさまし・い 【勇まじい】

(形)「文シク いさま・し」

「動詞」勇む」の形容詞形」

(1)危険や困難を恐れず、積極的に事を行うさま。

「一・く突進する」

(2)周囲の非難を恐れず、大胆に行動するさま。皮肉やからかいの気持ちで使うことが多い。

「状況を一切顧慮しない一・い発言もいくつかあった」

(3)人の心を奮い立たせるようだ。勇壮だ。

「一・い行進曲」

(4)進んでそうしようという気になるさま。

「後世のつとめも一・しき世/一言芳談(上)」

C 子どもなのに、しっかりしているというところ

C 巴御前は、女なのに、いくさに参加した。

C 普通の女の人は、いくさなんてしないのに、巴御前は、いくさをやっている。

C 男みたい。

T そうなんだ。鎧兜でちゃんと準備をして、男の侍と一緒にいくさに参加しているんだ。

それも、ただ参加しているだけじゃなく？

C 強い。

C よせくる敵を、ばったばったとなぎたおした

T よせくる敵、というのは？「よせくる」ってわかる？

・よせくる波、というように使うんだけど。

C どんどんよせてくる

C 敵が、どんどんやってくる。

T その敵を、ばったばったとなぎたおした。これは？

C 次々にやっつけた

C 敵を、どんどんやっつけた。

C 敵が来てもきても、やっつけた。

T どういうふうにしてたかかったというところ？

C なぎなたをふるって

T 普通、侍は？

C 刀を使う

C やりも使っている。

T そうだね。でも、巴御前は、なぎなたです。なぎなたって知ってる？

C 見たことある

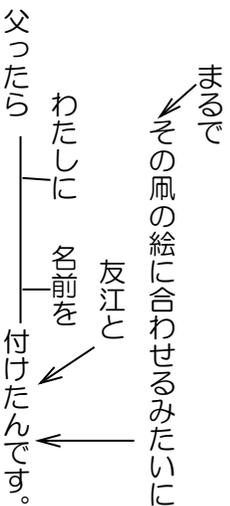
*これも写真などを用意した方がいい

T 長い棒の先に、刀のようなものがついている武器なんだ。

今でも、高校に、なぎなた部がある学校があって、女子がやっているみたいなんだよね。

そういうのをぶって、男の武士と一緒に、戦場で敵をばったばったとやっつける女性だったんだね。

ついでにというと、源義経と同じころの人で、だんなさまは、義経の敵だったらしい。



まるで (副)

(1) 下に否定的な意味の語を伴って否定の意を強める。まるきり。全然。

「漢字が一読めない」「一違ひ」

(2) ほとんど同じであるさま。ちよつと。をながら。

「一風のようだ」「一子供だ」

みたいだ (助動)

「^{みだ}いだろ・^{みだ}いだつ・^{みだ}いで・^{みだ}いに・^{みだ}いだ・^{みだ}いな・^{みだ}ららる・^{みだ}らる」

「見たようだ」の転。明治中期以降の語「体言、形容動詞の語幹、および活用語の終止形に付く」。

(1) 様子や形などが似ているという意を表す。

「機械〈みたい〉く正確な動作をする」

(2) 連体形または連用形を用いて例として示すに用いる。

「僕は神戸や横浜〈みたい〉なく所が好きだ」

(3) 不確実な事柄を引用するに用いる。

「近頃からだを悪くしている〈みたい〉なくことを言っていました」

「アメリカに二、三年行く〈みたい〉なく話でしたよ」

(4) 不確かな断定や遠まわりの言い方、時には推定の意を表すに用いる。「あの人はちよつと疲れている〈みたい〉だ」

(5) (主として) 女性や子供の言葉として(語幹相当の)「みたい」が単独で、または終助詞「や」「ね」「わ」などを伴って用いられることがある。「このみかたは腐った〈みたい〉だ」

* 本文は、(4)の用法にあらぬ。

たり

「^たりたら」「^たりたら」の転。「^たりたら」の形を用いられることが多い

(係助)

名詞、動詞・形容詞、一部の助動詞の終止形、形容動詞・助動詞「そ」だ「の」語幹に接続する。

(1) 軽い非難・軽蔑、または親しみの気持ちをこめて、話題として提示する。「おじいちゃん、なかなか起きないのよ」「や」

(2) 異常な性状であることなどを述べる場合、身、命、それがどんな点についてであるかを驚きの気持ちをこめて提示する。「たりない」の形でも用いられる。「あの痛れい、何ともしようもないよ」

(終助)

(1) 名詞および活用語の終止形に付く。

ア、じれったい気持ちで呼びかける。

「あなたっー。返事へらららら」「や」「や」「や」

イ、意味を強めて言い切る。

「いやだっー」「私がするっー」

T さて、そこで次の文だ。
だれのこと?

C 父です。

C 父ったり

T 父がどうした?

C わたしに名前をつけた。

C 友江と、名前をつけた。

T 友江という名前は、どういふことかというの?

C まるで、風の絵に合わせるみたいに

C 巴御前のともえ

T そうだね、わたしの名前は、巴御前からとったんだ。

でも、言い方には、なんだか、気持ちがあるね。

まず、「父は」ではなくて、「父ったり」になっているよ。

C ちよつと、怒った感じがする。

T みんな、そんな感じがする。

C ^{つん}。
だっかにそういう意味もある。

例文

ア、お姉ちゃんったら、テレビを見ながら寝てしまった。

イ、あの子ったら、ランドセルを忘れていっちゃったわ。

T ちよつと。

C やっぱり怒っている。

C あきれている感じがする。

T すく怒っているんじゃないか、。「しかたないなあ」といった感じだ。それに、怒っていないなくても、好きな人にこんな言い方をしたりするんだ。大好きなお姉ちゃんが、テレビを見ながら寝てしまったらするよね。

T さて、わたしが、お父さんの何にあきれているかというの?

C 風の絵にあわせたように、わたしに名前をつけた。

T そうなんだよね。巴御前ではなくて、風の方のことを言っている。本当は、風に合わせるというのよ。

C 巴御前

T 巴御前みたいにびっになってほしかったんだろっ。

C 勇ましい人になってほっこ。

T でも、昔の女の子は女の子らしいという時代なだけだよ

あ。勇ましいというのよ。

C 元気な子であってほしい。

C 元気いっぱいの子

T そんな気持ちがあったのかも知れないね。

* これは、あくまで想像。深入りしない。
T でも、風に合わせるみたいと、わたしは言っている。それから考えるとお父さんの風つくりのようすがうかんべんじやないっ。

C いっしょうけんめい作った。

C 初めての女の子の絵を、工夫してかいた

T きっと、そうなんだ。我が子のために、風つくりにいっしょうけんめいだった。で、名前を友江とつけたから、まるで

風に合わせたように感じたんだ。そう感じたのは、だれ?

C わたし

(2) 活用語の言い切りの形(時には連用形や助詞)で「なぞ」に付く。
命令・要求などを表す文に多く用いられ、自分の意図がなかなか相

T えっ？ そうかなあ。わたしは、お父さんが風を作っているのを見てたの？

手に通じないことをいらだたしく思う気持ちをこめていう。
「早く起きなさいっ」「もっと静かにっ」「今日はもうぐっぐりしてっ」

C 見てない。

C お母さんだ。お母さんが、そう言っていたんだ。

T きっと、そうだな。お母さんから聞いていた思い出話をずっとしているんだからね。

どっちにしても、今日勉強したところから、お父さんがわたしのことを思ってくれていることがわかるね。

* ここで、再び、最初の文にもどってもいいかもしれない。

「これ、わたしのだからです」の「だから」にこめられた思いの一端がうかがえる。